

共同研究プロジェクト紹介 基幹型：日本語レキシコン 連濁事典の編纂 連濁とオノマトペの疊語

著者	バンス ティモシー・J
雑誌名	国語研プロジェクトレビュー
巻	5
号	1
ページ	32-38
発行年	2014-06
URL	http://doi.org/10.15084/00000764

連濁とオノマトペの畳語

Rendaku and Mimetic Reduplication

ティモシー・J・バンス (Timothy J. VANCE)

1. 連濁とは？

連濁とは、日本語で最も知られている形態音素的現象（音韻交替）であり（菊田 2007）、近年英語でも“(Japanese) rendaku”と呼ぶようになってきた。連濁は主に複合語にかかわる現象であり、単独では無声阻害音（清音の子音）で始まる形態素が複合語の後部要素となる場合に、無声阻害音ではなく、有声阻害音（濁音の子音）で現れる現象を指す。

(1) 「空」	「空色」	「星空」
/sora/	/sora + iro/	/hoši + zora/
		▲ 連濁

便宜上、有声阻害音で始まる異形態を「連濁形」、無声阻害音で始まる異形態を「非連濁形」と呼ぶ。(1) の場合は、/zora/ が連濁形、/sora/ が非連濁形である。連濁形は語頭には現れない。

2. ライマンの法則

ライマンの法則は、通常以下のように述べられる（Vance 2007: 157-159）。

(2) ライマンの法則（Lyman's Law）

形態素の中間に有声阻害音がある場合、その形態素は連濁しない。

「青」	「鮫」	「青鮫」	「青」	「鷺」	「青鷺」
/ao/	/same/	/ao + zame/	/ao/	/sagi/	/ao + sagi/
					▲ 有声阻害音

「鷺」のような形態素はライマンの法則によって連濁に免疫があると言える。(3) に表示されているように、ライマンの法則および他の制約とは関係なく、特異的に免疫を持っている形態素も少しはある。

- (3) 「露」 「朝露」 「〇露」 「紐」 「靴紐」 「〇紐」
 /cuyu/ /asa + cuyu/ *X + /zuyu/ /himo/ /kucu + himo/ *X + /bimo/

3. 語彙層

外来語要素では、連濁はほとんど起こらない。中川（1966: 308）は以下の例を挙げたが、連濁した形式が自然であるかどうかは怪しい。

- (4) 「山」 「キャンプ」 「山ギャンプ」 「インド」 「カレー」 「インドガレー」
 /yama/ /kyaNpu/ /yama + gyaNpu/ /iNdo/ /kareH/ /iNdo + gareH/

オノマトペ（擬音語・擬態語）の要素は連濁に抵抗し、さらに「しくしく」や「とんとん」のような数多くの置語のオノマトペは連濁することはない（奥村 1955, 他）。以下に示す2点の根拠から、連濁に抵抗するのは置語であるからではなく、オノマトペであるからと言える。まず第一に、「ぺちゃくちゃ」のような、置語ではないオノマトペの複合語は、（その数は少ないものの）決して連濁しない（Hamano 1998: 47-50）。第二に、オノマトペに当てはまらない他の置語は、ライマンの法則に違反しない限り、連濁するのが普通である。

- (5) 「国々」 「時々」 「度々」
 /kuni + guni/ /toki + doki/ /tabi + tabi/
 ▲
 有声阻害音

4. 準オノマトペの置語

元々オノマトペでない形態素が“準オノマトペ”になることもある。

- (6) 「ラブラブ」
 /rabu + rabu/

「ラブ」の場合は、語頭の子音が無声阻害音ではないので、連濁の対象外であるが、以下の2例はどうであろうか。

- (7)  

このような例は確かにあるが、「縞」、「蟹」を意味する和語名詞形態素は決して連濁しないわけではない。

- (8) 「横縞」 「兜蟹」
 /yoko + jima/ /kabuto + gani/

Nishimura (2013: 83-87) は、重畳が表わす意味によって疊語を、(1) 複数・強調の重畳、(2) オノマトベ的の重畳、の 2 種類に分ける。日本語の複合語は、並列複合語を除いて、後部要素が主要部であると一般に認められている。Nishimura もこの右方主要部の原則に従うが、複数・強調の重畳の場合は、基体（語基）が主要部であるのに対して、オノマトベ的な重畳の場合は、重複子（コピー）が主要部であると提案している。疊語の語彙範疇（品詞）は、主要部から引き継がれるので、複数・強調の疊語の場合は、基体と一致するが、オノマトベ的な疊語の場合は、重複子と一致する。

- | | |
|----------------------------|----------------------------|
| (9) 複数・強調の重畳 | オノマトベ的の重畳 |
| [BASE] _x | [BASE] _x |
| [COPY] _y | [COPY] _y |
| [COPY + BASE] _x | [BASE + COPY] _y |
| ▲ | ▲ |
| 主要部 | 主要部 |

準オノマトベ的の疊語は純粹オノマトベ的の疊語と同様に連濁しないと仮定すれば、以上の (7) に挙げた例は Nishimura の提案によって説明できる。

- | | |
|------------------------------|------------------------------|
| (10) 複数・強調の重畳 | オノマトベ的の重畳 |
| [/kuni/] _N 「国」 | [/kani/] _N 「蟹」 |
| [COPY] _y | [COPY] _A |
| [/kuni + gani/] _N | [/kani + kani/] _A |

「国々」は「国」と同様に名詞 (N) であるのに対して、「かにかに」は「蟹」と違い、副詞的または形容詞的 (A) である。

5. 意味と統語的機能

Nishimura の提案が魅力的であることは否定できないが、その 2 種類の疊語の区別は必ずしもはっきりしているとは限らない。まず第一に、“強調”と“オノマトベ的”の意味的な相違は曖昧である。そして第二に、名詞という範疇の中にはいくつかの下位範疇があり、意味的に形容詞に近い形容動詞も含まれている (Martin 1975: 176-183)。しかも、名詞としても副詞としても振る舞う単語が数多くあり、副詞的な機能を示す助詞が付くケースもあれば、

付かないケースもある。

- (11) 「本当に」 「堂々と」 「案外」
 /hoN + toH ni/ /doH + doH to/ /aN + gai/

Nishimura は、オノマトペ的な重複の 1 例として、名詞の「皴」から派生した量語「しわしわ」を挙げている。この「しわしわ」は、確かに複数を表すものではないが、統語的には典型的な名詞の振る舞いを示す。主格助詞「が」が付くと、文の主語になりうることが明らか証拠である。

- (12) しわしわの指になる。
 指がしわしわだ。
 指のしわしわがなくなる。

一方で、名詞の「粉」から派生した量語「粉々」は、文の主語や目的語にはなりえないため、典型的な名詞から外れていると解釈できる。

- (13) 粉々のガラスがある。
 ガラスが粉々だ。
 *ガラスの粉々が残る。

つまり、「粉々」より「しわしわ」のほうが典型的な名詞である。それにもかかわらず、連濁に抵抗するのは「粉々」(/kona + gona/)ではなく、「しわしわ」(/šiwa + šiwa/)である。

また、動詞や形容詞から派生した量語の中には、意味的にも統語的にもかなりオノマトペ的なのに連濁するケースも珍しくない。

- (14) 「重ね重ね」 「近々」
 /kasane + gasane/ /čika + jika/

「粉々」, 「重ね重ね」, 「近々」のような例は化石的に残っているが、現代日本語の生産的なパターンでは、オノマトペ的な量語は連濁しないと Nishimura は主張している。

6. 通時的変化

先行研究 (Unger 1975: 36-37, Martin 1987: 103-104) で指摘されたように、日本語の上代文献に記録されている非オノマトペ的な量語の中には、連濁しないものもいくつかある。奈良時代には、オノマトペ以外の量語が連濁するという現代語で見られる傾向がまだ定着していなかったと思われる。連濁の有無だけで意味が区別されたい語のペアも 1 対ある (現

代語の「時々」を比較参照)。

(15)	上代の発音	^{oJ} /toki/	^{oJ} /toki + doki/	^{oJ} /toki + toki/	(^{oJ} = Old Japanese = 上代語)
	万葉仮名表記		等伎騰吉	等枳等枳	
	意味	「時」	「時折」	「その時その時」	

このような意味の区別が実際にあったとすれば、Nishimura が提案した現代語の区別とは一致しない。「その時その時」という意味が複数のなのに、その意味を表したのは連濁なしの^{oJ}/toki + toki/ である。その反面、「時折」という副詞的な意味を表したのは^{oJ}/toki + doki/ のほうである。

ちなみに、Labrone (2012: 118) によると、現代語では“分配的”な意味を表わす豊語は連濁しなくてもいい。「その時その時」という意味は分配的と言えよう。

7. 確率的に考える

連濁の根本的な不規則性は否定できないが、日本語の母語話者が連濁の生起する複合語を全部丸暗記していると考えただけでは問題は解決しない。なぜなら、聞いたことのない新語や実験刺激語に連濁を適用することもあるからである (Vance 1980, Kubozono 2005: 5-7, 伊原・村田 2006, Kawahara 2012)。心理的に妥当なモデルを作るには、様々な要因の相互作用を考慮しなければならないが、その要因はある程度、実在語が示すパターンに基づいているはずである。

Nishimura が主張したように現代日本語ではオノマトベ的な意味に連濁を防ぐ力があるとすれば、その力は、昔から次第に強くなってきていると考えられる。つまり、豊語の語基が語源的にオノマトベ層に属するか否かはともかくとして、母語話者が豊語全体の意味を 1 要因として扱うことができるということである。一方で、Labrone が提案したように分配的な意味が連濁を防ぐ力は段々弱くなってきて、現代語においてはほとんど連濁に影響しないと見える。

●参照文献●

- Hamano, Shoko (1998) *The sound-symbolic system of Japanese*. Stanford/Tokyo: CSLI/Kuro시오.
- 伊原睦子・村田忠男 (2006) 「日本語の連濁に関するいくつかの実験」『音韻研究』9: 17-24.
- Kawahara, Shigeto (2012) Lyman's Law is active in loanwords and nonce words: Evidence from naturalness judgment studies. *Lingua* 122: 1193-1206.
- 菊田紀郎 (2007) 「連濁」飛田良文他 (編) 『日本語学研究事典』356-357. 東京: 明治書院.
- Kubozono, Haruo (2005) Rendaku: Its domain and linguistic conditions. In: Jeroen van de Weijer, Kensuke Nanjo, and Tetsuo Nishihara (eds.) *Voicing in Japanese*, 5-24. Amsterdam: John Benjamins.
- Labrone, Laurence (2012) *The phonology of Japanese*. Oxford: Oxford University Press.
- Martin, Samuel E. (1975) *A reference grammar of Japanese*. New Haven: Yale University Press.
- Martin, Samuel E. (1987) *The Japanese language through time*. New Haven: Yale University Press.

- 中川芳雄(1966)「連濁・連清(仮称)の系譜」『国語国文』35(6):302-314.
- Nishimura, Kohei(2013) Morphophonology in Japanese compounding. Ph. D. dissertation, University of Tokyo.
- 奥村三雄(1955)「連濁」国語学会(編)『国語学辞典』961-962. 東京:東京堂.
- Unger, J. Marshall(1975) Studies in early Japanese morphophonemics. Ph. D. dissertation, Yale University.
- Vance, Timothy J.(1980) The psychological status of a constraint on Japanese consonant alternation. *Linguistics* 18: 245-267.
- Vance, Timothy J.(2007) Have we learned anything about *rendaku* that Lyman didn't already know? In: Bjarke Frellesvig, Masayoshi Shibatani, and John Charles Smith (eds.) *Current issues in the history and structure of Japanese*, 153-170. Tokyo: Kurosio.

《要旨》 連濁の全体的な不規則性は一般に知られているが、オノマトペの畳語は一切連濁しない。一方で、オノマトペ以外の和語畳語は、たとえ意味および文法的振る舞いがオノマトペに類似しても、連濁しやすい。そこで、新しく作り出された“準オノマトペ”の畳語が連濁に抵抗することは興味深い。Nishimura (2013) は、“複数・強調の重畳”と“オノマトペ的重畳”を区別し、後者だけが連濁不可と主張する。しかし、その2種類の重畳の意味的対照が必ずしも明瞭であるとは限らない。

Abstract: *Rendaku* is notoriously irregular, but it never occurs in reduplicated words that are uncontroversially mimetic. On the other hand, *rendaku* is the norm in most other kinds of reduplicated words involving native Japanese bases, even though many such words are semantically and grammatically very similar to reduplicated mimetic words. Interestingly, we see a conspicuous resistance to *rendaku* in recently coined quasi-mimetic reduplicated words. Nishimura (2013) suggests that there are two kinds of reduplication: intensive/plural reduplication, which allows *rendaku*, and mimetic reduplication, which prevents *rendaku*. However, the semantic distinction between the two types is not as clear-cut as one would hope.

ティモシー・J・バンス (Timothy J. VANCE)

国立国語研究所理論・構造研究系教授。Ph. D. (言語学) (シカゴ大学)。フロリダ大学助教授、ハワイ大学准教授、アリゾナ大学教授等を経て、2010年1月より現職。

主な著書・論文: *An introduction to Japanese phonology* (State University of New York Press, 1987), *The sounds of Japanese* (Cambridge University Press, 2008), *Rendaku in Sino-Japanese: Reduplication and coordination* (*Japanese/Korean Linguistics* 19, CSLI, 2011), Benjamin Smith Lyman as a phonetician (*Journal of Japanese Linguistics* 28, 2012) 等。

基幹型共同研究プロジェクト「日本語レキシコン—連濁事典の編纂」

プロジェクトリーダー ティモシー・J・バンス (国立国語研究所 理論・構造研究系 教授)

プロジェクトの概要

本プロジェクトの最終目的は、連濁に関連するあらゆる現象を可能な限り明らかにする事典を編纂することである。取り上げる課題は、(1) 連濁の由来と史的变化、(2) 連濁と表記法、(3) ライマンの法則、(4) ローゼンの法則、(5) 連濁と形態・意味構造、(6) 連濁と語彙層、(7) アクセントと連濁の相互作用、(8) 連濁と言語学理論、(9) 連濁に関する心理言語学研究、(10) 方言の連濁、(11) 連濁研究史、等々。事典には、包括的な参考文献一覧も含める。